

ユスト高山右近の生涯と信仰

97

禁教への道

慶長6(1601)年から慶長17(1612)年の長い

期間は、日本の教会にとって穏やかな時代でした。政権を握った徳川家康は、秀吉の禁教令を解除しなかったものの、ポルトガルやスペインとの貿易を推進したために、布教を黙認していました。諸大名もキリシタンに対しておおむね好意的でした。

慶長5(1600)年に、オランダ船リーフデ号が、豊後に漂着し、家康は航海長のイギリス人、ウィリアム・アダムスを家臣として召し抱えることにしました。日本のカトリック教会は、プロテスタントのアダムスが、誤った情報を家康に吹きこまないように働きかけましたが、うまくいきませ

ませんでした。カトリック教会に対するアダムスの敵意は、家康の心に疑惑の目を育てていくことになりました。

キリシタンに寛容な態度を示していた家康でしたが、このままではいけないとの危機感を抱くに至った事件が、立て続けに起きました。慶長13(1608)年、キリシタン大名・有馬晴信の朱印船がマカオに寄港した際、晴信の家臣を含む朱印船の乗組員とポルトガル人との間に争いが生じ、60余名の日本人が殺害される事件がありました。その翌年、この事件に関連したアンドレ・ペッソアが、マードレ・デ・デウス号のカピタン

(船長)として長崎に来航しました。ペッソアは事件について家康に釈明し、寛大な処置を得ていました。ところが、朱印船の生き残り

から事情を聞いた、長崎奉行の長谷川左兵衛は、一方的な報告書を作って家康に見せました。家康はそれを信じて、ペッソア側の意見を聞くことなく、有馬晴信に命じてペッソアを召喚させようとした。

これに対して、身の危険を感じたペッソアは、召喚に応じることなく、デウス号に乗り込んで出帆しようとした。晴信は長谷川左兵衛らとデウス号を包囲して攻撃を加え、4日目にデウス号は沈没してしまいました。

慶長16(1611)年にイスパニア(スペイン)大使として、セバスチアン・ビスカイノが、日本との貿易を求めてやってきました。彼らは船が安全に入港できるように、測量を始めましたが、その態度が悪く人びとの怒りを買いました。そこで家康がアダムスに測量の目的を問いました。アダムスは敵意から「測量は戦

時のときだけで、イスパニアはまず宣教師を派遣しその後で兵士を送り込んで、その国を支配する」と答え、すべての宣教師を国外に追放すべきであると主張しました。

そのような折、岡本大八事件が起こったのです。有馬晴信は、豊臣時代に失った領地を回復したいと願っていた。そこへ、家康の側近である本田正純の与力・岡本大八が、家康がデウス号の恩賞として旧領地を晴信に与えるという、まったく虚偽の話を持ち掛けたのです。その話を信じた晴信は、多額の賄賂を大八に送りあつせんを依頼しました。返事がないことに不信を抱いた晴信が、直接正純に問い合わせたことで、大八の虚偽が発覚し、贈収賄事件が明るみに出たのでした。

この事件を機に、禁教が現実のものになっていきます。

「カテキズムの学び」

第29回 新型コロナウイルスとカテキズム(その8)

10月から信仰養成講座が再開されましたので、コロナ関連のお話は今回で最終回となるよう願っています。先月号である信者さんから「コロナが終息するように毎日たくさんお祈りしているのに、神様は全然聞いてくださいません。悪魔の力の方が強いんですねえ……」と言われた話をし、前半の「神様が祈りを聞いてくださらない」について触れました。今回は後半についてです。

ウイルスが病気や死を引き起こすこと自体は、言わば自然災害ですから、悪魔の力が働いているわけではありません。しかし、パンデミックの状況が続く中で、弱い立場の人びとが苦しめられたり、私たちの心の平和が失われて不安になることは、悪魔が働いている結果かもしれません。

悪魔は「墮天使」(カテキズム391番)、つまり元は天使でした。ですから、私たち人間よりも賢いと言えます。

とはいえ、サタンの力は無限ではありません。被造物にすぎないのです。……神の国の建設を妨げることはできないのです。サタンは世にあって、憎悪により神とイエス・キリストによるみに抵抗し、その行動は人間各自と社会に——霊的に、間接的には身体的にも——重大な損害を与えますが、人間と世界の歴史を力と優しさをもって導いておられる神は、その摂理に基づいてそれをゆるしておられます。(395番)

ですから、あくまで神様がゆるされている範囲の中でしか働くことはできず、人間が逃れられないような苦しみ陥らせるようなことは悪魔にはできないのです。

神が悪魔の行動を妨げておられないのは深い神秘ですが、「神を愛する者たちには、万事が益となるようにともに働くということを、わたしたちは知っています」(ローマ8・28)。(同)

悪魔に対する最終的な勝利は世の終わりまで待たなければなりませんが、イエス様自身が悪魔を退けられ、死を打ち破って復活されたことに確かな希望を持ちつつ、困難の中でも信仰をもって歩んでいきましょう。

(文 酒井俊弘補佐司教)

大阪教区司祭

ペトロ 西山俊彦神父(86歳) 帰天



西山俊彦神父は、10月11日(月)、前立腺がんのため、ガラシア病院ホスピスで帰天。他と妥協することなく、平和のために心血を注ぎ、また執筆活動

に最後まで情熱を持っていた。

【略歴】 1935年1月2日、山形県酒田市生まれ。61年12月、司祭叙階。ローマのウルバノ大学、米国セントルイス大学大学院で学ぶ。65年、87年、旧英知大学教員。関目、旧桜宮、ガラシア病院、香里で奉仕。86年から、旧大阪カトリック神学院居住。89年、2000年までガラシア病院チャプレンを務めた後、旧三日市居住。05年以降、小野原司祭の家居住。今春、司祭叙階ダイヤモンド祝(60周年)を祝った。

「生かろ」——難民移住者

叫べないNちゃんの心

「容姿が日本人でない人が受けるウンザリ問答があるある」について若者たちが盛り上がっていました。「英語喋れるん」「両親どこで出会ったん」「親、何で結婚したん」等々。ある青年は「出会うてすぐの人に向かって、両親のなれそめなんて、フツー聞くか?」と青筋立てていました



が、確かにこれはブライバシーの侵害だなど私も気づかされ、知り合いのNちゃんのことを思い出しました。

Nちゃんは自分が嫌いで、化粧をして肌の黒さを隠したが、縮れた髪を直毛に近づけようと

し、

マスク義務化に安堵しています。Nちゃんは幼い時から容姿をからかわれ、好奇の目を向けられ、出自を根掘り葉掘り聞かれました。やがて不登

校になり家の中で暴れて物を壊すようになりまし

た。

ある日、「Nが教会へ行きたいと言っんです」と祖母から相談を受けた

ので、私は緊急事態宣言下でもミサを公開している教会を探しました。当日、起立性障害で朝の苦手なNちゃんは大幅に遅刻して教会前に着きました。残念ながら聖堂は人数制限されていてすでに扉が閉められ入堂を断られ、集會室でモニターを見るように案内されました。Nちゃんは会議用長机に上半身を投げたて寝るふりをしたり携帯電話をいじったりしました。

その帰り道、Nちゃんは「聖マリア大聖堂に行きたい」と呟きました。「小さいとき、お父さんが連れて行ってくれた」。祖母によると、両親が離

婚したあとNちゃんの実父とは離れて暮らしていたそうです。二年前に父の訃報を受け、Nちゃんは棺に納まる父に対面し、父が最期まで娘に会いたがっていたことを叔父から知らされました。父の死を境にNちゃんは家に塞ぎ込むようになっていきました。

Nちゃんは私に「大聖堂に行ったらナイジエリアの人たちがいっぱいいるね」と言いました。Nちゃんのもう一つのルーツ、ナイジエリア。父と、大聖堂。今、Nちゃんは手首にたくさん傷をつけて精神科に入院しています。退院したらカテドラルのミサに行く約束をしています。

(文 シナピス事務局 ビスカルド篤子)

カトリック墓地 納骨堂・納骨所

使用者募集

大阪教区の信者の方のみがお申込みいただけます。詳細は資料をお送りさせていただきます。教区ホームページ上のこのバナーをクリック

カトリック墓地 納骨堂・納骨所

資料請求やお問い合わせは 教区本部事務局 管理課 竹中まで ☎ 06-6941-9705

わたしは復活であり、命である。 ヨハネ11・25

